

# サミット盛り上げよう



発行所  
北海道新聞社  
郵便番号 060-8711  
札幌市中央区大通西3-6  
電話 011(221)2111  
©北海道新聞社 2007

## 速報

インターネットで道新ニュース  
[www.hokkaido-np.co.jp](http://www.hokkaido-np.co.jp)  
ご購読申し込みは  
0120-464-104

## 道新スポーツ

# 洞爺湖町で道新トーク

## 記者、取材体験を語る

## 意見交換、万全な準備誓う



来年七月の北海道洞爺湖サミット(主要国首脳会議)に向けた「道新サミットトーク『世界』をどう迎える―記者と考える」が二十五日、洞爺湖町内で開かれた。本紙記者三人が今年のドイツ・ハイリゲンダムや二〇〇〇年の沖縄の両サミット取材の経験を語り、会場との意見交換も通じてサミット成功のための課題を考えた。

同日夕には登別市内でも開かれる。主催は北海道新聞室蘭支社(両会場とも)、同伊達支局(洞爺湖会場)。会場は洞爺湖町が洞爺観光ホテル、登別

来年七月開催予定のサミットに向け、開催地域としての課題などを熱心話しあった道新サミットトーク25日、洞爺観光ホテル

同日夕には登別市内でも開かれる。主催は北海道新聞室蘭支社(両会場とも)、同伊達支局(洞爺湖会場)。会場は洞爺湖町が洞爺観光ホテル、登別

会場が登別クラウンドホテル。洞爺湖会場では、約六十人が参加した。二部構成で、第一部は東京経路の西山由佳子、本社報道部の田中祥彦、室蘭報道部の榎木野寛の三記者がそれぞれ基調報告し、第二部で会場と意見交換した。西山記者は「ハイリゲンダムから洞爺湖へ」と題し、地球温暖化ガス削減を

巡り各国の思惑が交錯した今年の会議の様子を紹介。引き続き環境が主要議題の洞爺湖サミットは「削減目標や義務の課し方、方向性を出せるかが成否のカギ」などと話した。

田中記者は沖縄とドイツの両サミットを取材し、洞爺湖サミット開催決定後も周辺取材を続けている。「地元役割をうかがわせた。

は」と題した報告では、地元の知名度向上や経済効果を得るために「地元資源を見直し、情報発信を」と呼びかけた。榎木野記者は、サミット開催から七年が経った沖縄での取材を元に「サミットの光と影―沖縄報告」という題で報告した。「沖縄はサミットを最大限に活用してPRを重ねた。それが今の沖縄ブームにもつながっている」と分析した。基調報告を踏まえた第二部の意見交換では、会場からも活発な意見や質問が出され、八カ月後に迫ったサミットへの関心ぶりをうかがわせた。

# 道新記者が開催地に提言

## ガス排出、方向性出せるか

東京政経部

西山 由佳子

ドイツのサミットは、国連の下で地球温暖化防止に向けた二〇一三年以降の国際枠組みを〇九年までにまとめるとの合意に達しました。京都議定書から離脱した米国を引き戻した点で、存在意義を示す会議でした。

現地取材陣にも近年にない緊張感がありました。外務省が直前まで「合意できるか予断を許さない」と繰り返し、欧米のマスコミも



悲観的な見通しを書いたからです。最終日を待たず合意に達し、プレスセンタールも驚きや興奮に包まれました。

ただ、合意を優先した結果、五〇年までに温室効果ガス排出を半減する数値目標を「真剣に検討する」とするなどあいまいさが目立ちます。洞爺湖サミットは

削減目標や義務の課し方で方向性を出せるかが成否のカギを握るでしょう。拘束力のある目標割り当てを目指す欧州、技術開発や排出権取引で削減を狙う米国、参加しやすい柔軟性を重視する日本など各国が主導権を争い、着地点は見えませんが、外務省は地元への歓迎ムードが見えないことを懸念していましたが、官民一体の道民会議の発足などを経て道との歯車がかみ合い始めてきました。

# 青い湖面「世界」を招く



湖面が輝く洞爺湖。来年7月には世界の首脳を魅了するのは確実だ

# 地元の「発信」成否のカギ

報道本部

田中 祥彦

サミットは国の事業。運営は議長国政府が担います。地元自治体や民間が運営の中心となる五輪と異なります。地元自治体の役割は国への協力や支援が中心で、PR活動も制約を受けます。

ただ、地方開催が主流となった現在のサミットで、サミットの議題とともに、開催地にまつわる話題が注目を集めるのも事実。知名



度アップや経済波及効果が期待されることも否定できません。二〇〇〇年の洞爺ではサミット期間中をPRの機会

ととらえましたが、今年のドイツではサミット開催前売り込みの時期と位置づけました。共通するのは、地元の「資源」を見つめ直

し、情報発信した点にあります。限られた期間、手段で最大の効果を得るには、報道機関を巧みに利用するしかないでしょう。地元が円滑な運営に協力するだけなら、ただの「場所貸し」に終わります。

自治体や住民はもちろん、反対派も環境派も含め、サミットにかかわることが肝心です。それぞれの立場でG8に向き合うことが、サミット後にも生かせる遺産の源になるでしょう。

# 沖縄の「楽しい」「学びばい

室蘭報道部

樺木野 寛

二〇〇〇年の沖縄サミットから七年が経った沖縄県を十月中旬、取材で訪ねました。印象的だったのは、サミットに対する沖縄と北海道の関係者の熱意の差です。沖縄では関係者の多くがサミットを「楽しい思い出」と語るのでした。

県内の各自自治体はこそって各国首脳を招待し、わがまちのPRとして「したた



か」に活用しました。基地問題も抱え、世界の目を沖縄に向けたいとの思いもあったそうです。その熱意が

今の沖縄ブームにつながっていると感じました。振り返って洞爺湖はどうでしょう。厳重な警備の影響で観光客が減るのでは

ないか、日常生活に支障が出るのではと不安ばかりが先に立ちました。本命の国内候補地を押しつけて決まったことへの戸惑いもあったのかも知れません。

来年のサミットには首脳以外に警備や報道関係者など数万人が訪れます。各国の利害が絡む環境問題の議論と同時に、洞爺湖にどれだけの好印象を持ってもらうかも重要。客人を大切にもてなす―基本に返ったプラスの発想が必要でしょう。

道新サミットトークの主催は北海道新聞室蘭支社(両会場とも)洞爺湖会場。後援は、北海道胆振支庁、北海道洞爺湖サミット胆振地域推進会議(以上両会場)、洞爺湖町、洞爺湖町サミット推進町民会議、洞爺湖温泉観光協会(以上洞爺湖会場)、登別市、登別観光協会(以上登別会場)